

文：雁ヶ音伊織

声にだして、言ってくれないと。

言わなくても伝わるだろうなんて怠惰だよね。

そう言って 20 年来の親友は電話で笑った。わたしも隙間なく同意する。

思い出したように電話をしてくる親友は今夜は酔っ払っていて、昨日過ごした彼氏との一夜を事細かに報告する。

冷蔵庫から炭酸水を出してコップに注ぐ。お酒は飲めないけど、ジンジャエールとこれはわたしのお酒の代わりだ。ご機嫌な親友の話聞くうち、わたしもだんだん機嫌が良くなる。

「だけどさ、愛してるって言ってくれないんだよね」

「愛してるって言えないひともいるでしょう」

「わたしは言っちゃう。いくらでも言っちゃう」

そして会話は冒頭に戻る。

知り合ってから長い付き合いの中で、親友の彼氏はたぶん歴代紹介されている。それでも、愛してるって言ってくれない問題、略して愛してる問題は初めてかもしれない。

親友とは、長い付き合いだけあって、なんとなく「こう考えてるな」という勘が働く。それでも、お互い言葉にして伝え合うことを大事にしている。嬉しかったときの報告はもちろん事細かに。悲しいとき、それは恋が去ったときだったり、大事なのに大事にできなかったひとがいるときなんかだけど、少ない口数かもしれないけど言葉にして、言外の意図を汲み取って、ふたりで重ねてきた。

さて、愛してる問題。

わたしは愛してるとはあまり言わない。好きだ大好きだは頻繁に言うけどね、そう告げると、親友は分かるが同意しかねる、というふうに笑う。青春時代を自己主張が全ての国で過ごした親友は、恋人に対してはもちろん、わたしのよ

うな友人に対しても全部でぶつかってくる。そりゃもう遠慮なく。好きと愛してるの境界線は確実にある、と力説する。言わんとすることは分かる。だけれど同じようにわたしができるのかと言えばそうではなく、わたしはわたしの考えがあってこうしている、というのを伝える。

沈黙。

「でも、どうしても愛してるって言葉が聞きたいときはあるじゃない？」

疑問形だけれどこれは肯定してくれという意味だ。ふむ、とわたしは思い巡らす。確かに、愛してると言ってほしいときは、あるな。好きでも大好きでもなく、愛してると言ってほしい。親愛と友愛の違いだろうか。英語のラブとライクの違いみたいに、決定的な違いではないところがもどかしい。でも、わたしは日本語のこの柔らかさが気に入っていて、好きとすき、愛してるとあいしてるを意識的に使い分けている自覚がある。だからこそ、考える。愛してる、と、あいしてる、の違いを。

親友がほしいのはきっと「愛してる」のほう。それは親友が恋をしているからで、相手と家族になりたいと思っているからで、一緒に過ごした時間を事細かにわたしに話して聞かせてくれるほど彼に溺れているからだ。わたしにたまに言ってくれる愛してるは、きっとひらがなの「あいしてる」だ。親が子どもにするみたいに、そっとほっぺたをこすりつけるようなあいしてる。そこに欲はなく、ただただあったかいお布団みたいな愛。

「愛してるって、どうして言ってほしいの」

「だって悔しいじゃない、わたしばかり好きみたいで」

「でも愛されてるってわかってるよね、本当は」

「わかってる。だから悔しい。言葉にしなくても察してくれっていうのは大嫌いなはずなのに」

「惚れた弱みって言うんだよそういうの」

「そんなこととっくに知ってる」

主語のない親友のお喋りは、本当に彼氏と親友だけのことだろうか。親友は人間関係と同じく、全力で恋にもぶつかっていく。同じ人間だとは思えないくらい、必死で、何度もぶつかる。わたしはそれを羨ましく思いながら、影で応援する。わたしが愛してるを言葉にするのが苦手だとしたら、親友は愛してるを体現するひとだ。文字通り、言葉でも体でも。好き好き大好きと犬のようにしっぽをふり、嫌われるとしょんぼりしてうじうじする。そして次の相手を見つけて飛びかかる。

親友を見守るうち、よくも次から次へと、と呆れるのはどうの昔に置いてきた。そのくらい一生懸命なのを知っているし、次々彼氏を紹介されても親友が今幸せならそれでいいやと思う。尻軽なんじゃなくて、ちゃんと毎回記録を更新するくらい好きなのがすごいと思う。

「でもさ」
ひとつため息。

「好きになったんだもん、しょうがないよね」
親友の中ですでに答えは出ていて、幾千万の女子よろしく、話を聞いてくれる相手がいるだけで満足そうにする。

どんなに相手と蜜月を過ごしていようと、ふとひとりにかえった時間に親友はここへ戻ってくる。ただの女に。そしてわたしは何回でも思う。親友にとってこれが最後の恋であればいい、幸せになってほしい、と。この気持ちこそが愛なんだと実感する。でも親友には何も言わない。今夜こそ、言ってみようか。

「ねえ」
「あ、ごめん、こっちの話ばかりだった。なんか話したいことあった？」
「愛してるよ」
「酔ってる？」
「酔ってない。愛してる」
「うんありがとう知ってたよでもなんで今かなってちょっと考えた嘘うれしいなほんと気づいたの今なのなんだそう思ってたのわたしだけかとずっと思っ

た」

親友は今までの気だるさが嘘みたいに一気に喋ってそのまま電話を切った。なんだ、愛してる問題の解決方法はこんなに簡単だったのか。そう思いながらベッドに入り目を閉じた。